

君は、今、そして50年後、どう生きるのか？—「高校紛争」世代からのメッセージ

自治医科大学医学部 1979年卒業・みさと健和病院救急総合診療研修顧問

立川高校 24期卒業 箕輪良行

るらるゆらゆさすしむすずじましまほし、バリスト「共産党宣言」、代返

生き方を決めたのは立高だった。人生の友を得たのも立高だった。50年前の1969年春、私は立川高校に入学した。1年C組男子クラス（当時男女比は3：1で男は2年間、男だけのむさいクラスに入る）で世阿弥（本名＝村瀬二郎先生）がさっそく古文文法の暗記ツールを唱えた。数学の小山恒雄先生は大学レベルの内容を教えほとんどの生徒はついていけなかった。「とんでもないところに入った」と感じた。東村山1中が1-2番でやっと入学した私は、勉強もせずあやしげな本を読んでいる井上哲夫・榎陽介君を最初バカにしていたものの彼らに読書や遊びの大切さを学び世界が広がることになる。井上君は兄貴も立高で東大に入る秀才だった。立高の仲間はみんな輝いていた。

東大安田講堂のバリケードが機動隊により封鎖解除されたのは入学前の1月だった。「大学紛争」は「高校紛争」に飛び火し10月に立高もバリケード封鎖された。そのため1か月間授業は全くなく、1年の後半はまともな授業は少なく私たちもマルクス「共産党宣言」「賃労働と資本」レーニン「帝国主義論」といった本を読み議論を戦わせて日々を過ごした。一昔前の先輩たちの教養はデカンショ（デカルト。カント・ショウペンハウエル）だったと教わった。

高校2年の時、教室には半数足らずしかいないのに全員出席の代返で授業は普通に始まり、高校3年では、某先生が世界史の授業なのに自分が好きな天正少年使節の日本史を教え続けた。先生も生徒も好き勝手なことをやっていたともいえるが、「勉強は楽しい」と先生たちが信じていることは生徒に伝わり、生徒も高校生活を楽しんでいた。

400人弱の同級生で100人近くが受験した東大を、私も受験した。我々の東大合格率は1割弱で私も浪人した。1年間国分寺公民館で井上哲夫、正村俊之、清水保君達と猛勉強した。翌年、京大理学部合格し「生化学をやろう」と吉田寮に入寮手続きもした。ところが直後に、自治医大から予想外の合格通知が来て困りはてる。立高化学の恩師梅木松助先生に「生化学は医者になってからでもできる。とりあえず医者になるほうがいい」とバランスの好いアドバイスを頂き医者の道へ進むことに決めた。

人の役に立つ科学技術者になる、伊豆七島ソロプラクティス、ピーク昇りつめ下山中

私たちの高校時代はベトナム戦争反対、70年安保改正、公害被害者救済が日本の課題だった。私は目標を「目の前にいる人たちの役に立つ科学技術を持った医者になること」に定めた。6年間の医学部生活を47都道府県から来た秀才たちと憧れの全寮生活で過ごし学園祭実行委員、寮委員長も楽しんだ。医師免許をとってからへき地でソロプラクティス（単独診療）できるよう都立豊島病院で内科・外科・小児科・産婦人科・麻酔科を回って2年間研修し、重症患者数の国内で最も多い日本医大救命救急センターで1年間の修業もした。1982年から東京都出身の自治医大卒業医として三宅島阿古診療所で働き始める。

研修や修行で自信を持って勤務していた 1983 年 10 月三宅島雄山が噴火して被災した。避難島民と共に暮らし働いた災害体験は私の人生観を変えた。「救急医学を深め最新の医学を学び続けねば」と。1985 年都立墨東病院救命センターに勤務。アメリカにも渡り世界最新の診療も学ぶ。さらに第一線のプライマリケア（患者の身近で何でも相談に乗れる総合的医療）を学ぶため自治医大に戻り医学博士の研究修練を積んだ。1992 年から再び三宅島で 3 年間働く。その後今に至るまで三宅島の医療を気にかけて係わり続けている。

その後船橋市立医療救命センターでドクターカーシステム確立（詳しくは拙著『ドクターカー緊急出動』小学館 2003 年を）に係わり 2004 年聖マリアンナ医科大学教授となり救命センター長、臨床研修センター長を兼務した。立高で学んだ「泥臭く格好悪くとも信じる所をやり抜く」を続けた結果、国内レベルの 2 学会で学会賞を頂戴し、2019 年日本救急医学会で功労会員に推戴された。私は一流ではないが、超二流をめざして自分の背丈にあったピークに登りつめることができた。平和で豊かな時代に立高と医学部で青春を過ごし、精一杯働けたことに感謝している。

リタイア後は、1970 年代以降のフーコー、ドゥルーズ、ガタリ、ネグリ、ハーバーマス、ナオミクラインといった社会科学、ドーキンズ、リーバerman、ニックレインなどの生物学、梅原猛、加藤周一、源氏、ルグウィンの文学を乱読して、EU3 万 km ドライブ、ナイル川下りなどの世界旅行やサクソ演奏もしながら、父が亡くなった 82 歳までは人生を楽しみ続けることを願っている。東京の田舎出身の元エリートとして人生の山をこれからゆっくり下り続けオンリーワンの生き方を楽しんで行きたい。

さて君は高校生活をどう楽しみ、その後どのように生きていくのだろうか？



1994.12.18
（毎月 6 日・18 日・26 日発行） 第 1517 号

三宅村 高度医療に威力発揮
全身用 CT が撮影開始

東京七島新聞
東京七島新聞社
〒270-0201 千葉県船橋市大船 1-1-1
TEL 0476-81-1111 FAX 0476-81-1112
大船支店
TEL 0476-81-1111 FAX 0476-81-1112
船橋支店
TEL 0476-81-1111 FAX 0476-81-1112
五洋建設